

## Unterwegs im eigenen Land. Japanische Reiseliteratur – Die Erfahrung des Fremden?

ドイツ語圏における日本学学会は、3年に一度開催されている。本論文は、1999年に開催された（ドイツ語圏の）日本学学会において、三つの発表から構成されたパネル「紀行文学と外国からのルポルタージュにおける異文化認識と自己認識」において、一部分を担ったものである。

アイルランドのダブリンで、1994年に「異文化の認識と体験」というテーマでシンポジウムが開催された。そのシンポジウムの過程で、本当に異文化を認識・体験し得るのかという懐疑がふくらみ、テーマ自体に「？」が付け加えられることとなった。そのことに端を発した本論は、日本では紀行や旅行記が好まれるという事実の確認から始まる。

続いて、日本紀行文学だけではなく、日本文学全体を代表する「奥の細道」において、外の世界と芭蕉らが知らなかったであろう人々（エトランゼ）をどのような形で描写しているかを検討する。そこで、米国の文学理論者である Jonathan Culler 氏がつくった「agent of semiotics」という概念を、芭蕉に应用すると、芭蕉は確かに「bad tourist」になってしまう。なぜなら、芭蕉の有名な紀行では外の世界および囑目の景はほとんど出てこないからである。しかし、芭蕉は観光客として旅に出たわけではなく、俳人として行脚したわけである。その事情を念頭におき、懐疑主義や構成主義やポスト・構造主義という哲学伝統の立場からみると、外の世界はそのまま知覚して描写することができない。言い換えれば、風景とは個人が構成する「美的な事実」である。

ヨーロッパの18、19世紀の紀行文学において、その旅行の目的は、見知らぬ国の魅力に引かれて外の世界を探検すること、異郷や他人と知り合うことが大部分であった。それに対して、日本紀行文学が示す旅の目的は、必ずしも外への旅ではなく、内への旅ということもあり得たのである。というのは、日本文学にも外への旅という目的があっても、もっと深い層にもうひとつの内への旅という動機が隠れているのである。ここで内への旅と述べているのは、近代文学においては、例えば日常生活を後にすること、あるいは一人になる可能性、あるいは我を忘れて旅先に分散する機会といった旅への動機である。

このように考察すると、比較文学を議論する際に忘れてはいけないのは、異文化の認識と体験を目的としない旅が存在し、その旅をきっかけとする旅の文学があるということである。

ダブリンのシンポジウムのような国際的に紀行文学を議論する場において、ヨーロッパ人は彼らの知覚からできた文学だけを研究

自分の国を旅する  
日本紀行文学 「他」の体験であるか

©R.F. Wittkamp

の対象とし、更にはその文学がヨーロッパ中心主義的であると批判している。しかし、学術世界がヨーロッパの紀行文学だけに焦点をおく限り、紀行文学だけではなく、それを議論するディスクールもヨーロッパ中心主義の範囲から脱け出すことができない。そのディスクールのヨーロッパ中心から開放するには、日本の旅の文学が役に立つことは間違いないであろう。